

ころ

夏目漱石

20世紀少年

凝視する

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う氣にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に

二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達に、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分からなかつた。けれども実際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より帰るべきであつた。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

こころ

学校の授業が始まるにはまだ大分^{だいぶん}日数^{ひかず}があるので鎌倉^{かまぐら}におってもよし、帰ってもよいという境遇^{きんぐう}にいた私は、当分^{たうぶん}元の宿^{しゆく}に留^{とど}まる覚悟^{かくご}をした。友達は中国のある資産家の息子^{むすこ}で金に不自由^{ふじゆう}のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもなかった。したがって一人^{ひとり}ぼっちになった私は別に恰好^{かつこう}な宿^{しゆく}を探す面倒ももたなかったのである。



宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものは長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。